

第 7 回 子ども未来応援会議

日時 平成 24 年 7 月 19 日(木) 午後 1 時 30 分より

会場 生涯学習センター 第 1 学習室

出席者 委員

大坪委員長、岡村委員、内川委員、片山委員、金原委員、小山委員、
佐野委員、榛葉委員、大社委員、禰津委員、堀見委員、松永委員、
村本委員

事務局

教育部長、生涯学習課職員、教育推進室職員

委員長 今日少し議題を絞り込みまして、「藤枝型学校支援地域本部」の在り方について皆様のご意見を伺いたいと思います。

お手元に資料がありますので、それを見ながら聞いて頂ければと思います。
まず説明をお願いします。

生涯学習 学校支援地域本部事業につきましては、生涯学習課が主体になって行っている事業となります。いま藤枝市が取り組んでいる事業の現状を説明させていただきます。資料を 1 枚用意しましたので、資料に沿ってお話させていただきます。

この事業につきましては、平成 20 年度から国が推進している事業になります。内容はというと地域で学校を応援していこうという趣旨で事業を進めていくものになります。

藤枝市につきましては、資料に書いてありますように、地域の教育力低下の解消や、先生が子ども一人ひとりに対するきめ細やかな指導をする時間を確保するため、地域全体で学校を支援していこうと取り組んできております。藤枝市では平成 22 年度から青島小学校をモデル校というわけでは無いですが、最初に事業化させて頂きました。当初は国が推進していくということで 100% 県の委託事業ということで県予算で対応しました。実際にはコーディネーターという方を 2 人お願いしまして、学校とのつなぎ役・地域とのパイプ役になっていただいて、学校に対する要望、また、地域の方々が学校に対してどんなことができるのかということ調整していただきました。

23 年度は、新たに藤岡小学校を加え 2 校。青島小学校は大規模校で児童が多い学校になりますが、それに比べると藤岡小学校は一学年 2 クラスで中規模か

ら小規模な学校です。それぞれの規模によって学校の運用も違うということで青島小学校と藤岡小学校の2校で行っています。予算も前年度は100%委託事業でしたが、23年度は国・県・市1/3ずつの負担として事業を実施しました。コーディネーターは前年同様2名です。

今年度24年度ですが、少しずつ増やしていこうということで、小学校だけでなく、地域でと考えて中学校区がいいということで、瀬戸谷地域が小学校中学校1校ずつでエレベーター式に上がっていく地域であり、小学校・中学校一体として取り組んでいます。

活動実績としては県に報告していますが、日数では青島小学校について学習支援44日・環境整備159日、藤岡小学校はそれぞれ17日と75日です。具体的な取り組みの内容は、学習支援としていろいろな形で講師の人を派遣するなどですが、今は先生方も人数が少なくなり1人で対応しなくてはいけないことも多いので、すべての授業を専門的に対応できない。左の写真は明誠高校の生徒さんに陸上競技の指導をしてもらっている写真になります。他にも書道や音楽・和楽器など小学校の授業に多岐にわたっており専門の講師を派遣しての授業への学習支援ということで行われています。

それからもう一点は環境整備として主に藤枝市が取り組んでいるのは、花の水やり、花壇の植え替えです。学校の先生の代わりに地域の方が支援していこうと活動している。それ以外には掃除を地域ボランティアの方がされています。

学校支援について、なぜ生涯学習課でやっているかですが、本来学校支援となりますと学校のメリットになることばかりだと思われれます。これには3つのメリットがあると考えておまして、一つは言葉どおり「学校の教師の負担が軽減される」。教師も専門的な方法を学ぶことができる。二点目は「子どもが先生以外の大人と触れ合える」。今、核家族化で家族以外の大人に触れ合えることがないので、その機会を増やすことで子どもたちにもいい影響を与えられる。三点目は「ボランティアや講師として参加する方が生涯学習の観点で地域に貢献できる」。活動された方もすごくいい経験ができることから、学習支援を地域の方が取り組むような形をつくるように、県では生涯学習課を通して推進しているところでございます。

資料の方にはいいことしか書いてないようなところがありますが、課題もあります。一つは学校の理解がないとなかなかこういった活動はできない。学校支援地域本部は学校の下請けではありませんので、学校側が本来の趣旨を理解して、学校側の要求と地域の方ができることをお互いが理解し合っていかなければいけない。こちらはまだ説明が不足しているのかなと思います。

また、この活動はもともと都会で発生してきた発想で、藤枝のような田舎では地域の方が入るような活動は既にありました。登下校の見守りや外部指導者

が部活に入るなど既にやっている経過があります。そうした活動とこの学校支援地域本部事業の関係又は連携をどのようにしていくかも課題かと思えます。

コーディネートをやる方が一番重要なポジションを占めると思いますが、そういった方の人材確保や選任方法も、今後、各地域に広めていく上で課題になるのかなと感じます。

市長も学校支援地域本部については推進していきたいとマニフェストに謳っておりますし、私たち担当としましても今は4校、藤枝では27校小中学校がありますので、それをどういう形で推進していくのかを課題として考えていますので、こうした会議で皆さまの意見を聞いて参考にさせていただきたいと思っています。よろしくお願いします。

委員長 ありがとうございます。学校支援地域本部事業の説明がありましたが、中身を見ていくと、この会議で議論されてきたことと仕組みが共通している活動が行われているとの印象を受けます。ご意見ありますでしょうか。

A 委員 一昨年とその前年に学校支援地域本部事業の可能性について研究を始めまして、市内の中学校で一年目に教員調査を、二年目に地域住民意識調査を行って分かったことですが、今日も生涯学習課の人が説明してくれたように文部科学省でも社会教育系や生涯学習系が担当していて学校の先生はこの事業のことをあまり知りません。

そこで、まず説明するところから始めたが、先生方の意識は学校の負担になってしまうのではないかと考えていた。授業に入ってこられることもウェルカムな先生もいれば困惑する先生もいた。地域の人とどう接していいのかと。

現状について学校と地域が意識を共有して、この学校だったら〇〇が必要とお互い確認をして支援に入るといいのではないかという結論になりました。

地域の人に学校支援地域本部に関わってもらうためには、元々ご自身が教育に関心がある人はいいが、関心がない人は難しい。学習や教育へのアプローチをして、学習率を上げたところをお願いした方がスムーズに行く。^{ひとまよ}一纏めに誰でも何でもやってくれではなく、学校の特徴と支援する人それぞれの特技を活かせることが大事。話すのが好きな人は講師、体を動かすのが好きな人は運動会の手伝いなど、それぞれの持ち味を活かしたお願いの仕方が必要です。

藤枝市は遅れています。全国的には都会が進んでいて東京の杉並区は凄く進んでいる。朝読書や朝勉強など10分ぐらいやっているのは、この学校支援地域本部で来る地域の人です。プリントを配る人などもいて、その分を先生たちは会議の時間にできるようになる。他のメリットとして、地域の人がいつも学校に来るから子どもと知り合いになって、街で出会ったときにちゃんと挨拶して

くれる。それが地域の人への励みにもなるし、今はなかなか知り合いの大人の人でないと子どもは声をかけづらい、不審者の問題がありますから。都会では時差出勤で9時ごろ会社に行けばいい人は8時台の時間を使うことができる。そういう所がいいと思います。

問題は地域の人へのニーズと学校の要望を調整する役の人、コーディネーターをどう確保するかということ。その人はボランティアではなく、しっかり雇えるかどうか大きな問題だと思う。社会教育とか生涯学習をやろうとするとお金を使わずにどうにかという方向になりがちなので、しっかりやりたいなら人材をちゃんと養成して、プロとして仕事ができるような環境整備をしてもらえたら画期的だと思う。

委員長 ありがとうございます。今の立証的な研究に基づくレポートを踏まえて、いろいろとご発言いただきたいです。そもそもこういう事業によって、今問題になっているいじめ問題の解決にも役立つのですか。

A 委員 学校の現状をいいことも悪いことも含めて見せていかないと、地域の人への理解も得られず協力が得られない。大津市の事件も、学校の体質が違っていれば、そもそも隠ぺいみたいな問題にはならなかった。先生が注意しても難しい子どもいろんな人の目がある中であれば違うと思う。たまに街ですれ違うくらいでは悪いことしていても注意できないじゃないですか。ボランティアで入って、学校で顔見知りだったら注意し易くなるし、そうした目が増えれば子供への刺激は違うからいじめなども防げる可能性が高いのではないですかね。

B 委員 先ほど A 委員がおっしゃったコーディネーターですが、現在お願いしているコーディネーター2名もそういう仕事をしてらっしゃるのですか。

生涯学習 今いる2名は、主に学校が要望する講師の方を探すなど、全て地元でカバーできる訳ではないのですが、そういったことをしています。組織したボランティア団体の事務的な仕事もその方をお願いしたりしていますが、常時学校にいる訳ではないので。今のコーディネーターは、生涯学習課に勤務して、定例的な打ち合わせの時に学校に行って話を聞いている状況です。

B 委員 常時学校に居ないと良く分からないし、先生との繋がりも持てないのではないですかね。1人は常時学校に居てほしいですね。そういう中でコーディネーターの人に講師の選任とかやってもらったら新しい意見を出せるのではないかなと思います。

私はただ単に学習シーンだけかと思っていたので、1人は常時居て深く関わっていただけかどうかとA委員の意見から思ったのですけど。

委員長 コーディネーターの人は特別な教育を受けているのですか。基本的にはどういう人を選ぶのですか。研修とかはありますか。

生涯学習 お1人は小学校の先生を退職された方をお願いをし、もう一人は地域の方で仕事を退職されてから自治会町内会の役員を経験された方をお願いしております。

なかなかこのための勉強というのはないですが、県が生涯学習に関わるコーディネートの研修を実施していますので、できる限りそちらの方に参加してもらっています。

委員長 学校支援地域本部をやるにあたって、学校の中に前向きな取り組みへの理念とか計画とかがきちんと作られていて、その上でコーディネーターがやってきて全体で推し進めていく形になるのですか。

生涯学習 本当はそういう形にできれば理想的なのかもしれませんが、正直に言いますと、藤枝は遅れているとの意見もありましたとおり、国の方からこの事業を是非やってくれということで県を通して話がありました。事業は補助金も出ましたので、実施に至ったところもあります。

委員長 国に言われなくてもやっていたところはありますよね。

A委員 藤枝ではやっていなかったです。国からお金が来なくてもやれるようにするにはどうしたらいいかと思い、先生達の認識が薄い地区を選んで調査をやっています。補助金がある間だけやっていて補助金がなくなると終わってしまうものって多いじゃないですか。だから、将来的にも続けられるためには、どういうところを掘り起こせばずっと続けられるのかと思ひまして。

委員長 長くここで議論してきた教育の在り方の問題と凄く関係している。地域と一緒に教育するとか、地域のみんなで子どもを育てるとか、そういう理念や考え方が先生の方にもなければできない。急に押し付けられてやるのではあまりに考えがない。子どもを育てるのは学校だけじゃなくて、地域のみんなで育てるって今までの議論の中でたくさん出てきたような考えが先生達にもあれば、そうした動きは自然に生まれると思ひますけどね。

C 委員 市の別の施策になりますが、昨年度から学校マネジメント事業が立ち上がり、学校支援地域本部のようなスクールアシスタントという名前のコーディネーターを本校に置いています。コーディネーターの方は本校で選任しまして、地域のことを本当によく知っている方、加えて県の人づくり推進委員として県教育委員会の流れもよく知っている方に学校に入ってもらっています。

いつも予算がついて回りますが、この方には謝金を支払っています。

そこで思うのは、やはりコーディネーターがキーパーソンになるということです。この方と学校との話し合いの中で、学校は今何を求めている地域の方の力を学校経営の中にどう入れるのか、スタートにあたってそこが一番時間をとっています。

今年 2 年目になって今度はどう広めたらいいかと考えて、地域の人はとても元気になってくれるようになった、でも親世代が弱いから親を勉強させよう、巻き込もうってことになりました。今、お母さんたちを集めて読み聞かせの研修会をやって、ママボラ（ママボランティア）を立ち上げました。これも学校として読書を推進するという学校が持っていた課題と、何かお母さんやお父さんが活躍できることがないだろうかという課題をコーディネーターがつなげた。学校の求めていることと一致しないと、どうしても先生達は余計な負担が加わったと感じてしまう。そういう視点でも考えました。

それから PTA の活動がすごくマンネリ化してしまっている状況の中で、お父さんたち 26 人が集ってくれました。せっかくなので、その人たちの力を借りて PTA の「ふれあい祭」の中身を変えることを考えたのですが、特技を持った人もいたので、それを活かせるような企画にと考えました。それもやはりコーディネーターの力で地域の人や親を巻き込んでリンクできた。これからコーディネーターを育てるという意味でも、ここでの謝金を上手く使って形をきちんと築けたらなって思います。

委員長 親はこういう教育に参加したいと思っていますかね。今、良く言うじゃないですか、子どもに対する教育を放棄してしまって全部学校に投げってしまう親がいると。学校の先生はとてもやっていけないと、本当は親がやるべきことまで任されてしまう。

お話いただいたような方法でコーディネーターを通して親に「学校教育に参加してください」ということが進んでいった時に、藤枝の親の社会は「喜んで」ということになるのか。

C 委員 それはやはりすごく二極化していると思います。幼稚園や保育園の親は両親で

子どもの活動に参加していますし、小学校の入学式はご夫婦で来るのが常です。ですが 6 年間過ごす中でだんだん来なくなる。参加したい親は大勢いるのですが、やっぱり魅力がないからだんだん減ってきちゃうのかな。お勤めしていないお母さんたちに声をかけると本当喜んで楽しみにしてくださる方もいます。

人数はたくさんじゃなくていいので、そういう人たちが楽しんで他のお母さんを誘う。そんな形で広まっていけば本物になると思っています。やりたい人はやるし、やりたくなかった人もやりたくなる。

委員長 人間関係で軋轢あつれきができたり、余計なことで学校が巻き込まれることはないのですか。PTA の中に派閥ができるとか、先生をやりこめるような醜い場になるとか、そういうことは噂だけでそんなにあることではないのですか。

C 委員 まだ日が浅いのでそこまでいってないのかもしれないです。

D 委員 私の経験ですが、私は PTA 会長を 2 年やったのですが、PTA の活動は学校の校長先生の考え方・取り組み姿勢で全く変わります。参加したい親が居ても学校側がなんとなく「PTA は関係ない」という先生が多い学校もあります。それは校長先生・教頭先生次第で、何でこんなにうまくいくのかなって時もあります。それは間違いなくあります。だからといって学校側が良くないと言うのではなく、PTA 側も PTA 会長を誰がやるかで全く変わります。とんでもない会長にあたると学校を掻き回わされて学校側も大変だと思います。

文科省がこうあるべきと全国一律網をかけてやろうしていること自体が、もう時代錯誤です。県によっても自治体によっても違うし、同じ藤枝市でも校長先生の考え方によってもマネジメントは違う。校長先生の責任つものすごく重いと思う。「一律でこうです」なんてないです。校長先生もピンからキリまで、はっきり言ってしまいますけど。

いくつか質問したいのですが。国の学校支援地域本部事業は何年からやられているのですか。

生涯学習 国は平成 20 年からです。

D 委員 すると先ほど杉並区が出ましたが、三鷹市はその時の市長とその時の学校の校長先生が凄く熱い人で、こうしたいと親を巻き込んで地域を巻き込んでコミュニティースクールを確立したのですよね。そういう取り組みを見て文科省が他の所でもそういう取り組みができたらいいと思って作った事業ですよね。

A 委員 コミュニティースクールは学校運営評議会制度という形で、あれは学校教育サイドで立ち上げて浸透させている学校支援地域本部とは別のものになります。地域が学校に入り込んでいく事例が京都にあったのを文科省がいいねと思って全国に広めようとして作った事業という点では一緒ですね。

藤枝には名前はないが地域の地道な支援はあります。見守りとか水やりとか花壇をきれいにするとか読み聞かせとか、ずっとやっている活動はあって、そういう独自の地元で根ざした活動と突然降ってきたような事業とをどう整合させるか。整合させないという選択もありますが。

D 委員 どちらにしても、問題があるから問題を解決するためですね。その問題が地域の教育力が低下していることや、学校にきめ細やかな指導をする時間がないこと。その問題を解決するためにこの事業が機能するのは何とも言えないですが。逆の見方をすると、その問題を解決するために学校側や教員側で改善していることはあるのですか。分かりやすく言うと、きめ細やかな指導をしたいと本当に学校の先生が思うなら、どうやって自ら自分の時間を作ろうとしているのか。努力している取り組みがあれば教えてください。

事務局 ある時期から子どもたちが変わり始めていて、「個に応じた指導」の必要性がずっと言われてきています。その子その子の特性に応じた教育をしたいということで、学校のいろいろな取り組みの中で、1つは「TT」という教員が2人で対応する形。自分の空き時間には他の学級に入って先生をサポートしている。

もう1つは課題別です。子供達が特に勉強の面ではそれぞれ興味を持つ課題も違います。2人の先生が学級を3つのグループに分けてグループごとのそれぞれの子どもに応じた取り組みをしています。

D 委員 質問が悪かったのかもしれないですが、時間がないからきめ細かい対応ができないのであれば時間を作ればいいという解釈になる。そうすると本来やらなくてもいい業務を削っていけば、人の手を借りなくてもきめ細かい対応をする時間を作れるし、準備をする時間も取れるのではないかという考えで、時間をつくる取り組みで能動的にされていることがあるかを聞きたいです。

事務局 それは、良く言えば学校の組織的なマネジメントの中で会議を減らしたりとか出張を減らしたりとか、子どもに関する以外のことは減らしてきています。それは県の教育委員会も市の教育委員会も学校に求めてきていることです。

C 委員 質問を取り違えたかな。「こういう地域の支援などが入ってくださることで、

子どもに向かう時間が確保できるという成果がでていますか」という質問ではないのですね。

委員長 本来やるべきではないこと、やらなくていいことをやりすぎて時間が足りなくなり、そして他の人の手を借りているのではないか。これはやらなければいけない、これはやらなくていいというのはとても哲学的で仕分けは難しいかもしれないけど。実際のところはわかりませんよ。でも、本当はやらなくてもいいことをやっているのに、先生方はそんな考え方をしないで真面目に全部をやってしまう。だから忙しくなってそれで時間が足りないのではないですか、というのがD委員の考えていることですね。

D 委員 この事業自体が悪いということではなくて、物事を見る時に逆から見たらどう見えるか考えるので。逆に自分は「きめ細かな教育はもうやめよう」となったらどうなるのだろうかなんてことを考えたりします。前にも言ったと思いますが、教職員1人当たりの生徒数って30年前と比べるとだいぶ減っているはずですよ。それなのに「大変だ大変だ」って言うのがなぜだろうと。その答えとしていろんなタイプの子どもが増えたと、落ち着きがないとか。でも、それは学校でどうにかしようという話ではないと思うのですよね。そういう風に家庭でしつけられてしまった子どもは学校教育の中ではよほどのことがない限り難しいと思うのですよ。

委員長 学校でやるべきことと家庭でやるべきことの仕分けですね。本当は学校教育では何をやるべきなのかを考えずに、あらゆることを学校の現場に持ち込んでしまって、学校教育という範囲で解決しようとして。本来は学校教育の範囲ではない分が減っていけばということですね。

D 委員 そうです。例えば、自分の子供が通った小学校に落ち着きのない子がいて、どうしようもなく。その子の場合、しばらく親が付ききりで教室にいましたよ。

E 委員 今の話のようにすごく変わった子や落ち着きがない子が昔より増えたかどうかともかく、今の子ども全般的に言えるのは、例えばここに10人いて「明日はお弁当持っていらっしやいね」と全体に言っても伝わらないのです。10人に対して言った時は私に対するメッセージではないと思うわけです。極端に言えば1人1人に言ってあげないと自分へのメッセージだと感じない。それは家庭の教育力が落ちたというよりは、家庭の環境が変わって子どもの数が少ない中で

わりと面倒見良く育てられてきた。

先ほど「子供の数が少なくなっているのになぜ上手くいかないのですか」と聞かれていましたが、実際にはうまくいくようになったと思います。私の地域の学校では子供が落ちついています。昔に比べるとはるかに。それはやっぱり一クラスの人数を少なくすることによってかなり改善をされてきたと思います。

親が手に負えなくなってしまった子供については、やっぱり学校でも手の施しようがないです。学校が荒れた状態であればなおさらです。

学校支援地域本部の話に戻すと、これを誰がやりたいと思って取り組んでいるかが一番の問題です。学校はあまり思っていないとすると上手くいかないと思いました。学校として教員に時間がないという問題を、地域の教育力を取り入れた学校経営によって解決しようと、そうすることが子どもたちの為になると、そのためにはコーディネーターが必要で欲しいと学校が思わないとうまくいかないと思います。

だから、そうした学校の意識がない中でこの支援の本部というものがどこかに作られて学校に入っていくとなった時にどうなりますかね。「開かれた学校」ということも盛んに言われたのですが、学校は保守的と言いますか開くのがなかなか難しい。でも、こうした事業によって開かれていくだろうなとは思いますが。

せつかくの事業です。お金も人も出してくれる。学校が問題解決に必要なと思うところに地域の人の力がうまく入っていく。そうなるといいと思います。

委員長 先ほどの D 委員の意見では校長先生次第ということですか。

D 委員 その意味でも質問ですが、学校支援地域本部事業を積極的に活用したいという校長先生が藤枝市には何人くらい居るのですか。是非うちでやりたいと言っている学校は。

生涯学習 説明は校長会等ではいるのですが、手をあげて下さった校長先生、是非うちでやりたいという校長先生には未だに会ったことはありません。

C 委員 ただ、先ほど言いましたが、学校マネジメント事業としてやらせていただいているスクールアシスタントは私の学校ではありがたいと思っています。

生涯学習 もう一つ結果的ですが、実施した 2 つの学校、青島小と藤岡小は大変良かったと、後からですが言ってくれました。

F 委員 自分の子どもが学校に行っていた頃と今と比べると先生が忙し過ぎます。実際のところは詳しくわかりませんが、会議が多過ぎると思います。そういった時間も本来は子どもと接する時間に使って欲しい。子どもって先生に見られて信頼されたらドンドン自信を持つしね。自分から努力すると思うのです。

 学校側でも子どもと接する時間を増やそうという意識や努力がなかったら、こうした事業をしても全然意味がないと思うのです。

 学校支援地域本部の内容が上手くイメージできていないのですが、先生方ができないこと、例えば家庭でのしつけとか、課外活動で子どもに遊びを教えるとか、そうしたものを得意な人に講師として来てもらったりする。そのようなイメージでいいですかね。本当はやってあげたいけど、子どもたちと真摯に向かい合う時間をとるためにその部分はコーディネーターにお願いするという気持ちなら私は賛成しますが。先生にそんな気持ちあるわけでなく押し付けられているならダメだと思います。

G 委員 歴史的に言うと、学校の先生方が忙しい環境になったきっかけは給食です。それまではそれぞれお弁当を持ってきて、みんなで一緒には食べるけどそれぞれの食をしていたわけです。その時に先生は物語の本を読んであげたり、面白いお話をしてあげたり、〇〇するのはいけないよって訓話などをしていた。

 給食が始まると、「はい、白衣をしっかりとしなさい」「帽子を被って」「配膳台はキレイに磨かれているの」「しっかりと配りなさい、多すぎる少な過ぎる」と、1から10まで指導が要求されました。こういう事が1つのきっかけで、何か災害があるとすぐ防止対策。予防・訓練マニュアル作って指導しなさい。昔も「時の記念日にポスター」「火災予防週間に火災予防のポスター」とありましたが、それが「水を大切に作る作文」次は「人権を守る作文」と、もう大変な量になって先生方は対応に四苦八苦です。水を守る作文はこの学級とこの学級、人権を守る作文はこの学級と、仕分けまでしなきゃいけなくなった。

 先ほどご指摘がありましたが、子どもの数は減りましたが質はずいぶん変わってきています。身辺処理がほとんどできない子ども、登校を渋っている子ども、向こうでは喧嘩も起きている、先生は常に神経を張り巡らせていなければならぬ状況になってきた。

 私が言いたいのは学校の公民館化。学校を公民館のように考えたらどうか。

 学校開放と言うと、学習の状況とか行事を見せるという発想をしてしまうが、そうではなく日常的に、例えば〇曜日の〇時になると絵を描いている人や太極拳をやっているクラブが校庭の隅にいる。家庭科室でお料理教室をしている。

 このような公民館化していく活動も支援の要素になるのではないか。

 校庭の中で何人か本を読んでいる人がいて、先生が面白そうなその本の話

子どもにしてくれませんかと言う。そのように地域の人と先生方が仲良くする。そういう雰囲気を作っていく、これは非常に大切なことだと思います。学校の公民館化という言葉が適切かどうかわかりませんがそう思います。

それから PTA ですが、PTA も形骸化しているのですよね。何年も同じようなことを繰り返している。私が実際やったことですが PTA を学級化してしまう。PTA 会費も活発に活動する学級にはたくさん補助金をあげましようとした。そうすると隣の学級のやっていることが気になって、自分たちのクラスも負けなようにやろうという雰囲気が出て、新しい楽しい試みをする。先生と PTA のみなさんが本当に親密な関係になりました。ですから PTA も少し見直してみる。学校という場で子どもを中心にしますが、先生と親が親密な関係になればモニターペアレントもだんだんなくなるのではないですか。

得意分野を持った人を探すってことは、まさに学校自体が地域のみなさんや自治会にお願いするもの。学校に来てコーディネートして頂けるかは別として、その活動が非常に大事じゃないかと思っています。

ですから、この本部とありますが本部なんていない、これから地域と学校が取り組んでいく。本部はそこを支援する、それぐらいの勢いでと思います。

H 委員

学校支援地域本部事業が何を目的としているのかまだ少しわからない。資料に「藤枝での取り組み」とあって、地域の教育力の低下の解消と教員の方が忙しいので雑用部分をボランティアの方をお願いして教員の時間を作ろう、この 2 つくらいかなと。

この 2 つで考えて、地域の教育力の低下の解消と言うと昔は高かったということだと思うので、良かったという時代があればモデルにする。その一部を社会で支援となると自分の好きなことや仕事に関係することなら、そういう講師をやりたい人も結構いて、年間に何回かであれば喜んでやってくれると思いますのでボランティアでもいいと思います。

もう 1 つの教員の時間を作るための雑用の部分をということですが、雑用の中で子どもと触れ合うことがいいと言う人もいると思うが、その部分はお金を払わないとちょっと難しいのではないか。私が思った 2 つの目的で正しいとすれば、その 2 つは分けて、それぞれで実行した方がいいのではないかと思います。

この会議ですっと話し合ってきた地域の教育力とこの学校支援地域本部事業の関係がわかりませんが、この会議で話したものは地域全体で多くの人が関わって子どもたちの教育に関心を向けてという方向だと思います。コーディネーターを決めてとなると限られた人になってしまい地域の教育ということにならないのではないか。少しずつでもいいからたくさんの人に子どもたちの教育に

関心をもってもらい、教えてあげられる立場になってもらえると一番いいのではないかと思います。

I 委員 学校の現場それぞれに求めるものが違うと思うので、どういったものを求めていくかということと、地域と学校で求め合うバランスがとれて上手くいくのかなと感じました。

授業風景を見ると低学年には支援員が入っていて、授業をサポートしてくださっている。それでも学級によっては中高学年でも支援が必要な子どもさんがいて、先生も気の毒だなんて思います。いろんな子に関わりたいけど、1時間のうちにやるべきこともあるから、なかなか手が回らない。周りの子も自分なりに授業についていこうとしているが、その子の態度や言動が気になってしまっている。そんな場面を見ると1つ1つの現場で必要とされているものと地域の力が上手く合えばいいと思います。だから学習支援というところに地域の力が入っていったらいいなと思って聞いていました。

もう1つ思い出したのが、私の子どもが学童に入っている時に、その学童に入っている子どものお父さんが家具職人でした。そのお父さんは学童の指導員から頼まれて、子どもたちに木工細工を教えるってことがありました。その時にプロに出会わせるってすごくいい場面だなんて感じたのですよ。親という意味でも自分の子がいるところに教える立場に入って、自分の子以外の子どもたちと触れ合って、学校ではないですが子どもの組織に関心を持つというか、そういう親世代の意識の改革も必要だっておっしゃっていました。

自分の専門のところを子どもたちに見せたい、役に立てればいいなって親はたくさんいると思うので、ボランティアという中で力を出して頂ければ、すごく子供のためにもなると思うのです。子どももプロってすごいなって、〇〇君のお父さんって今まで知らなかったけど、すごいなって目を養う場になったので、学校現場でもこういう活動ができれば親としても嬉しいなと思いました。

J 委員 私はわかってないような気がして、今日の議題は今までこの会議で話してきた地域の教育力という中に学校支援地域本部事業というものを組み込んで提案の中に入れていたいという希望があって、それを論議しているのですか。

なぜ、この学校支援地域本部事業が突然に議題として上がってきたのかが私にはわからない。

事務局 この学校支援地域本部事業は、地域の力を学校支援にという文科省の事業ですが、藤枝市では元々の地域の支援もある中でなかなかこのコーディネーターを使ってという形が浸透して広がっていない経緯があります。ですから、みな

さんがおっしゃる「地域の教育力」の入り口として、たたき台になるのではないかと考えました。

J 委員 資料にもある「地域の教育力」という部分と既に始まっている学校支援地域本部事業をドッキングするための議論をという提案なのですか。

できれば、学校支援地域本部事業も推進できるし、教育振興基本計画にも書き入れることができるという提案ですか。

事務局 この会議で皆さんが議論していただいたことを形にするとして、現に実施している学校支援地域本部事業を皆さん流に料理した場合に「もっとこういうことを加えた方がいい」「こういう風にしたらここで議論した地域の教育力になる」というご提案を頂けたら嬉しいかなと思いました。

J 委員 今わかりました。その上で意見を言わせていただきますが、先ほどの意見で「地域の教育力が低下したということは前は良かった」という話がありました。では、前は良かったのは何だったのかですが、いくつか要素はありますが、一つは地域社会の店は小売り店舗だった。今のお店は入口から出口まで黙って買い物してこられる世の中です。私の育った頃は、魚屋に行って黙ってお金を握っているだけでは買い物はできませんでした。

地域が入るっていうのは「ななめの関係」と言っていますが、親子でもなく、先生と生徒でもない大人が関係してくることで、いろんなタイプの間人がいる中で人が育っていく。黙っていたらコミュニケーション取れないです。

昔はお手伝いで買い物に行って、そうしたらお店の人に頭を撫でて褒めてもらい、自己優越感っていうか、親に頼られてお手伝いして「ありがとう」と言われて、学習という形態とは違う人間関係の中で人は人として育っていた。

今は自己責任の子育ての中でみんなが孤立して孤独化して行って、最終的には乳幼児虐待が増えている。だから教育という中に「ななめの関係」を入れ込むことが大事だと思う。やっぱりイニシアティブを持つのは学校側で、学校の願う部分に、地域の宝である人を重ねていくこと。基本的に今育てていくべきなのは人間関係の繋がりで、「見守り隊」や講師として授業に来た高校生のお兄ちゃんと子どもの繋がり、ソフトを作ること。

国はいくつかのハードを提案しているようですが、縦割り行政で同じようなことしているなと思いましたが、ハードを提案する前にソフトだと思う。

人間関係の1歩は関心を持つことで始まる。藤枝としては、まず学校が学校支援地域本部事業って何だろうって関心を持って論議するところから始める。

以前、東京で校長先生やられていた方が、積極的に地域の方を学校に入れて

何が一番良かったかと言えば、「子どもへの理解が深まった」と言われたのです。学校の先生だけでは分からなかった子どもの長所を、「ななめの関係」の大人が入ることで発見できた。この子はこんなところでこんな力を発揮しているのだから、それがすごく良かったと。

園の周りには「見守り隊」の方たちが子どもにすごく声かけしてくれて、そういう繋がりがある時に底力を発揮してくれるのだろうと思う。効果は短期で出てくるものと、長期的に子どもが当たり前のことを当たり前にできる力を育むベースをこういう活動が作ると思う。

新しいものを作るよりも今あるものを改善していくって形がいいかなと、具体的な意見にはなりませんでしたが。

K 委員 これまでの話し合いでいけば、子どもたちに一番足りない「社会性・探究心・しつけ」そういう事を地域の教育力にお願いすることだと思う。日本一の教育を標榜するからには、国の補助制度に頼るのではなく、藤枝市独自で地域の教育力を高める方法を考えるべきだし、もしこの学校支援地域本部事業の効果が忙しい学校の先生の補助を地域がするという事ならば何の意味もない。

それから、子供の視点から見て魅力がなければいけない。子どもが社会性を身につけるためには外に出て行くこと。キャンプファイヤーや動物・植物の観察会など何でもいいが、子供にとって魅力が必要。先生の補助手伝いでは地域の教育力は活かせないと思う。

今はいろいろところで独自の個性を持った NPO が活動しているので、そうした団体と連動することもいいと思う。藤枝では山田辰巳さんが瀬戸川流域で活動されていますよね。今や社会性や情操の教育は学校の中では難しいと思うので、地域の「もう一つの学校」みたいなことを組織だってやってみたらいいのではないかな。文科省の事業にあるからやるでは教育日本一が寂しい。

委員長 文科省からやると言われてやるのはそもそも良くない。前から言っていますが、大学は文科省や国の言うことを聞かないことを前提にしないと本当の教育はできない。義務教育の場合は統一的な教育をやろうというのが強いですからね、小中学校でも文科省の方針に対して「私は結構です」って教育はできるのですかね。

A 委員 できるできないの問題というよりは、親から文句が出ると思います。今までの日本の教育行政は「教育の公平性」を非常に重視したので、国の学習指導要領で一定の基準を決めて、どこにいても最低ラインの教育を受けられますと保障するというのが義務教育なのです。規制緩和の頃からいろんな面で緩くなって

きていますが、同質性を求める日本人の気質がありますからね。変えてもいいと思いますが、拠り所がなくなるのは嫌だと思わないですか。

委員長 学習指導要領を守らないとすぐに叩かれてしまうという例が高校でありましたね。世界史だったと思いますが。

A 委員 未履修問題ですね。

委員長 あれは教えなくてもいいのに文科省は「教えなかったら卒業させない」として、親も押しかけて来ましたね。

同質性についてみなさんどう思いますか。例えばこの会議で考えていることは文科省から見れば新しい教育哲学だと思うのですよ。学校の先生だけが教えるのではなくて、地域社会も入ってみんなで子どもを育てようという哲学だから。もしみんなが同意して実践されたらかなり進歩的で違った教育になっていくかもしれない。ただ、みなさんが批判に耐えられるか、怒鳴られてもそれでもいいと。もしかしたら教育委員会も委員長も怒られて謝罪しなければいけないかもしれない。校長次第だっていうこともありますが、文科省に面倒くさいこと言われながらやるより、自分たちがやりたいようにやった方がいいのか、どう考えますか。

D 委員 私は文科省の決めたことをなぜやらなきゃいけないのかと率直に思います。そんなことなら藤枝市がやろうって言えば補助金なんか 1 銭もかからずにボランティアで地域の組織作ってやれると思います。そんなに難しくはないと思います。

コーディネーター役は多種多様な人にして、例えばここに集まっている人でもいいし、この学校がこういう事を求めていると言えば、引き受けられる人を探すわけですね。すぐに見つかりますよ。産業大学もありますから、機動力が足りなければ大学生に行って貰いましょうということもできます。

委員長 私の大学ではね、スーパーキッズスクールをやろうと思っていてどうやればいいのか考えている。文科省からしたらとんでもない話だと思う。でも大学は社会実験としてやるから文科省もあまり文句言えないと思う。でも義務教育ではどの程度できますかね。

D 委員 学習支援でも、先生が授業で教えているところにサポートをとというのは、先生も嫌だと思う。そうではなく職場体験したいので藤枝市内で引き受ける会社

を見つけるということなどなら学校側も先生も喜んでお願いしますとなると思っています。キャリア教育として、その職業の人が学校に出向いて話をするっていうのはもうやっていますよね。最近、スポーツの指導について専門的な指導技術を持っている方に手伝ってほしいというニーズもある。そういうのは藤枝市全体で見ればボランティアでもやる人はいますよ。潜在的に私の年齢より上の人は教えたいなっていうのがあると思います。

委員長 学校の先生は保守的だと話がありましたが「そんなよそ者が来て教えるなんて混乱するだけで困る。教えるのは私たちの役目だから口出さないでくれ」という意識は先生にはないのですか。昔はPTAが邪魔だという意識が先生にはありましたよね。うるさいから適当に相手しようという。学校の教育は自分たちがきちんとやると。それは強い責任感によるところでもあったと思うのですが。

D 委員 本当は校長先生や学校の先生から自発的に求める声上がるのがいい。ただ自主的に求めるのはなかなか難しい世の中になりましたかね。1割くらいの先生は積極的に言ってくると思いますけど。ちょっとソフトなお仕着せで「私たち支援部隊はこんなことができます、どうですか」と、別にいいと言う時は無理には押し付けずに、「お願いしたい」「試してみたい」という先生がいたら支援しますってそういう仕組みを作るといいと思う。受け入れてくれた先生の「やって良かった」という声が広まれば、いろんなところで可能性がでてくる。

A 委員 文科省の肩を持つようですが、文科省が言うことは、本当はきつくはないと思います。ただ、学習指導要領にかかる裁判もあって法的拘束力もありますけど、今は「基準」と言っているだけです。先生たちは自由にやっていますよ。型から外れていても大丈夫です。では何が問題かと言えば、先生たち自身がこうしなければと自分で自分を縛っていることがすごく多い。

これは管理職の先生が言っていたことで、先生は決められた中で工夫するのは得意だと、何十時間で〇〇を教えるとあったときに、どうやって子どもに教えるか工夫するのは得意だけど、決まったところ以外をどうするかという発想自体がない。発想が違うところに飛ばない部分については、地域の人でカバーする。それによってより良い教育にしていくことには、文科省からの^{とが}お咎めはないと思います。

委員長 私は文科省のことをこんなに規制がない省はないと思っています。私は産業界にいましたけど、厚生労働省や財務省は規制がすごいですよ。

前に文科省から受けた研究指定をある中学校で行った時に、文科省の役人や

県の教育委員会の役人が居るところで「文科省や県の教育委員会の言うことなんて聞かなくていい」とみんなの前で言って「そうですね」と文科省の役人に聞いたら^{うなず}頷いていました。

独自のものを作ればいいのですよ。大学も文科省のせいにして楽をしているだけです。本気になって自由にやったらどうですか。学校支援地域本部事業だってみんなの意見を聞いて藤枝モデルを作って藤枝流にやればいい。藤枝市民にこういうモデルはどうですかと提案すればいい。ここでもいろんな意見が出ていますが、教育哲学ですよ。

F 委員 先ほど A 委員が「先生は与えられた中でやるのは得意だけど、それ以外は」という話は分かる気がします。先生はいつも同じ世代ばかり教えていますからね、無理ないと思います

教育日本一と言うなら、学校にできないところをカバーするには地域の教育力って必要じゃないですか。何からやっていこうかと考えたら人材バンク登録だと思います。例えば小学校だったら PTA もあるから、一生懸命探せばその地域の中にいろいろな人材がいるはずですよ。地域の教育力を高めるためにはまず地域の人材を発掘して、そして登録してもらおう。学校ごとでもいいじゃないですか。登録してもらって必要な時に来てもらって協力してもらえばいい。そういうことがどこでも気軽にできたら、それはすごいなってなりませんか。

委員長 新しいやり方をやる場合には、校長先生やリーダーの納得を得てそれでいこうって意識改革は必要ですよ。未来型の教育に対して「これが伝統と文化だ」って思い込んでやっている人もいるから、地域を含んでみんなで新しく作っていきましょと合意形成して、それを藤枝モデルとして校長でも誰でも同じ方向にベクトルが向いてもらわないと困る。

J 委員 家庭の教育力・地域の教育力・学校の教育力と書いてあるその中身をきちんと抑えないと。家庭の教育力はなぜ必要かと言えば自己信頼感・基本的信頼感・アタッチメントという愛着の形成に凄く大事。先ほどの給食の開始の話は、家庭の教育力が崩壊して完全に家庭教育の積み重ねがなく、その中で学校の教育力が進められていることを示している。

じゃあ地域の教育力とはといえば、多様な価値観を学ぶのです。一緒にの事をして怒鳴る人もいれば喜ぶ人もいる。人にはいろんなタイプがいるのだから子供の価値観とか自我形成にとっても大事なことです。でも今はいろんなことが家族単位に動いて、買い物の話もしましたがそういう教育力は弱くなっている。

交通事故が怖いから一人でお買い物は行かせられない。不審者が怖いから声

もかけられない。子供の当たり前のことが当たり前でできる力が育つ環境がない中で、学校教育に地域を入れないともう人格が育っていかない時代に入ってきているとの考えが共有できれば進むのかな。

委員長 地域力とは何かということですね。

B 委員 先ほども話したが、結局、学校がそういう時間を作ってくれないとダメですね。でも授業時間が増えていっばいいいっばい。その中でもスポーツの選手が来て教えてもらったり、職場体験に行ったりしてはいるが、学校での楽しいことは削られてしまっている。小学校でのリクリエーションは今まで子どもが工夫してお化け屋敷とか作っていたのに時間がないからカット、中学校も運動会の時に踊ったりしていたのは練習時間がないからカット。楽しみが無くなっている。

受け入れる時間をとってくれないと地域も入っていけない。給食ひとつとっても地域から入ってきて手伝えればまた違ってくると思う。

この前テレビを見ていたら、プロの人たちが学校に行って 1 日授業するのをやっていました。ものまねの人だったのですが、子どもたちにグループでものまねを発表させたりして、度胸が要るのですよね。そのうちおとなしい子も笑顔になったりして、学校の先生だけが教えるのではなくていいと思えました。

私の子どもは学校で田植えをしたことがあります。田植えをする前に泥んこ遊びをして季節のこんな虫がいるよって説明してくれて、稲刈りした米で餅つきまでやって保護者も楽しかったのですが、「これも校長先生が変わるとなくなるね」って保護者同士で話していました。

学校自体がそういう時間を取ってくれないと、そういう部分でも上手くやってくれるコーディネーターがいてくれればなど。やりたい人はたくさんいると思います。私も学校に出てお手伝いしたいタイプなので。でも学校が変わってくれないと学校を変えるのはどうしたらいいかなって思います。

委員長 これは難しい問題なのです。市外のある地区の幼稚園・保育園から小学校・中学校まで参加している教育に関わっていますが、中学校に入るまではいいのですが、中学の途中からこんなじゃ高校入れないって親が言い始める。「私の子どもは進学校に行かせたいのに、そんな勉強じゃ困る、もっと勉強させてください」と。高校行くとまた「そんな教育じゃ困る、私の子どもは東大に行かせたいのに、もっと勉強させてください」と。中学校の先生も「それじゃあ進学校に入れないぞ」と指導する。藤枝も静岡も極端に言えばそういう傾向になるじゃないですか。

L 委員 特別支援学校では、学習指導要領に内容は示されていますが、それには囚われないです。まず実態があって、それに合わせて学習内容を考えて工夫して授業を作る。それを各学年、各学級それぞれでやります。その点では今盛んにやって欲しいと話されていたことは結構できているのかなと思います。私たちの学校は小学生から高校生までいるのでコーディネーターって魅力的だと思うのですが、コーディネーターの人が小1から高3までのニーズをコーディネーターするのは無理だなと。ですから私たちは自分達でやっています。

教員が探して交渉して連れてくる。県の予算で利用できるものは利用し、足りない部分は校長に任せられている予算をどこにどれだけ使うか。物はいっぱい買ってあるので謝金に使います。でも、たくさんのボランティアの方に入ってもらっていて、振り返るとたくさんの人に支えてもらっている安心を感じます。

ですから、学校単位でその地域の人がそういう形で入ってきてくれたら、学校としては支えられている安心を感じられて、地域の人も俺たちが学校を支えていると誇ることができる。これが国や県の予算でコーディネーター配置しますからどうぞとなると依存してしまうのではないか。「こういう人をお願いしますと言ったのに何でこんな人を紹介するのか」などと不平不満が出ないか心配だなと思いました。

E 委員 学校が変わらなければとの話がありましたが、以前、総合的な学習が正式に始まる前の年に岡部中学校が文科省の指定を受けて研究を始めました。全ての子どもが自分のやりたいテーマを研究するという個人テーマでやりました。

テーマにあった講師を地域の方から選んで、その講師のところへ見学に行こうとなりましたが、個人テーマなのでテーマもたくさんになり、小さな集団に分けて教師が1人ずつ付くとなると職員室に誰もいなくなってしまう。困るので保護者の方に学習ボランティアを頼みました。10人くらいが学習ボランティアでやってきて、見学先に生徒が電話をしたい時は傍にいて電話の掛け方の指導をした。なかなか話せない子の時にはボランティアの人がまず相手の方を呼び出してから本人に代わったりしていた。

総合的な学習の時間には学習ボランティアの方に常時入っていただいたのですが、地域の方を積極的に学校に入れていく中で、コーディネーターが必要になりました。10人の保護者の方と言ってもどんな方が来るかわからない。依頼・交渉から仕事の振り分けまで、その時は全て教頭がコーディネーターをしました。

総合的な学習は全般的には学校にとって評判のいいものではありませんでした。大変だと思う学校が非常に多かったです。学校に地域の方が入るのはすご

く大事なことだと思し、学校側も教師だけでは子どもを教育できない時代にあると思います。でも学校は保守的です。昔からいいと言われていることを教えるのは学校の使命ではあると思いますが、それでは 21 世紀を生きていく子どもたちに必要な力はつけられないと思うのです。すごく先進的な考えを持っているような人の力を借りていかなければ、子どもたちを教育できないと思います。そういう意味ではいろんな人が学校に入っていくのは時代の流れで絶対必要だと思いますね。

G 委員 先ほど「学校に時間的な余裕がない、もっと余裕が欲しい」と言われましたが、これは避けがたいですね。教育課程は一律ではなく、それぞれの学校が独自に組んでいいとなっていますが、学校側は苦勞する。なぜかというと 5 日制で土曜日がお休みだから。土曜日が休みではない頃と比べて授業日数が 1 年間で 30 日以上少なくなっていました。30 日と言ったら 1 ヶ月ですよ。

もし藤枝型学校支援地域本部を試行的にやるなら土曜学校をやってははどうでしょう。学校主体ではなく地域本部の授業として、とりあえず年に数度。地域の人で算数を教える人があるかもしれません。俳句や短歌をやっている人が国語の先生になるかもしれない。一度実践してください。

委員長 勉強を労働と思うからそうってしまった。勉強はエンターテイメントだと思えば土曜日は遊びだから。日本の人は勉強のことをきついと、仕事のように思っている。私にとって学問は遊びなのですよ。

面白い提案で私もやってみたいですね。

A 委員 先日、生涯学習インストラクターの会に出席してきましたのですが、社会通信教育協会で生涯学習インストラクター講座と生涯学習コーディネーター講座とあって藤枝は受講生がすごくたくさんいる。

人材はたくさんいるのです。ただ「学校は入りにくい」と言っていました。ですから、「学校に入ってください」いっぱい宣伝してきました。是非そういう人を使ってほしい。

地域の学校支援について雑用みたいなイメージを持たれてしまいましたが、授業に入り込んでいく勢いを持ってもらいたい。先ほどの土曜学校もそうですが、学社融合という考え方があって、家庭科の授業を公民館講座とドッキングして、講座に来ているおばさんと一緒に生徒が家庭科をやる。公民館講座で来た人は公民館の講座だけど、それが家庭科の授業にもなっている。そうすれば学校の時間を作らなくても授業もできるし地域の人も入ります。そういう可能性もあるのです。

図工とか美術でも、スライドや教科書を見るだけではなくて、校庭の隅で絵を描く人の描き方を見るだけで授業になるのではないか、やり方は発想すればいろいろあると思う。でも先生たちは頑なに「授業はこうあるべきだ」とあるから、たぶん国社数理英に入るのは大変だと思いますけど、こじ開けるのが是非ここでできたらいいです。

委員長

時間になりました。ありがとうございました。

今日はみなさんのご意見を伺いたいということでしたが、学校支援地域本部事業については藤枝方式でということでもいいと。文科省のやり方ではなく文科省から日本中から見に来たくなるような独自のものを作れるようにしたいというのが私の印象です。

やるからには学校・先生も地域と同じ意識を持って「学校と地域社会が一緒になって子供を育てるのだ」と。先生に藤枝方式は素晴らしいなって納得してもらわないと困りますね。そうでないと上手くいかない。学校の先生には頑なな人も多いですからね。

そして、どうも教育というと時流に乗り過ぎる。ちょっと教育界の人が言ったことにすぐに乗って方向転換してしまう。教育は10年か20年ぐらい本気になってやらないと、ゆとり教育を一生懸命やろうとしたら非ゆとり教育になり、教育を受ける方が可哀想です。どっしりと腰を据えてやることです。